永野さんの死に泣かされるために

「石田さあん」

九月二十六日午後四時過ぎ、二階で寝ころび本を読んでいた私に

「永野さんが死んだ」

「馬鹿なこつば言わっさんな。そげんかこつのあるか」

妻を半ば見ながら玄関へ。

CO患者だが、まさか。同月十二日に意識不明のまま、家族と言葉を交わすこともなく息を引き取った、CO患者の松本忠義さんを想い出しながら、服を着るのももどかしく、まさか、まさか、と頭の中は混乱しながら九十六棟へ走った。

「石田さん」

絶句する奥さんと娘さんの声を聞き、目の前に白布を顔にかけられ、息することもなく寝ている永野さんを見た時、私の背すじを寒いものが走った。身体が、ガクガクするのを押さえることができなかった。

「今日、久しぶりに植木のせん定ばしたつですよ。その後座椅子に座った父ちゃんと話しながら、夕飯の仕度ばしよったら、太か息ば三回せらしたけん、『父ちゃんおかしかよ。具合の悪かつね』、といってかたわらに行ったら、もう息の止まって……。すぐに大地評の曙病院に電話して……、お医者さんがすぐ来て色いろしてくれなはったばってん、『ご臨終』といいなはった。石田さん、父ちゃんの死はほんなこつね」

私は一言もなく、ただ奥さんの肩に手をかけるだけだった。

程なくして――

「父ちゃん、起きらんね。このまま逝かれては、うちはいやよ。起きてくれんね。……やっぱり、起きれんとね。父ちゃん。そうね。父ちゃんは焼酎が好きやったけん、末期の水のかわりに一番好きやった焼酎ばうんと飲まんね」

サジに焼酎をすくい、永野さんの唇をぬらす奥さんの前で、私は歯を食いしばって精一杯涙をこらえるだけだった。

死因――「CO中毒による脳内出血」。

翌二十七日に行われた葬儀は、あくまで会社の保安サボの責任を追及するかのごとく、天は小雨を降らせた。

会葬者は家のまわりを埋めつくし、殺人者である会社への怒りが沸騰するとともに、同じ苦しみを

自分達自身のまわりを見なおして闘おう

三川指導部　石田益雄

CO患者たちは口ぐちに、「俺達はどげんなっとじゃろか。明日の俺を見るような気がして、イライラする」、とささやき合っていた。

労働者屈辱の日――昭和三十八年十一月九日。そして、四十二年九月二十八日。

会社は「ペンペン草が生えてもわず、呼吸すらできないほどの粉じん箇所が増え続けている。私が掘進をしていた昭和二十年代の初期の頃、岩粉で一寸先も見えない中で作業をし、息苦しいあまり真白い鼻くそをほじくったものだったが、それ以上にひどいものだと聞く。身の縮む思いがする。

私は、資本に左脚をもぎ取られてから十一年になる。身体的な苦痛は歳をとるごとに増すばかりである。その身になって見ないとわからない、とよく人はいうが、じょう談ではない。なってしまってからではおそいのだ。

――自分の職場の実態はどうじゃろうか。

――生命と生活を守る。

――COの闘いは、患者救済だけの闘いだろうか。

じっくりと、自分達のまわりを見直す必要があるのではなかろうか。自分のために。そして自分を何にもまして愛してくれている妻と子供のために。

個人の力は弱くても、結集すれば大きな力となる。何だかんだといっても、一番大事なことはこのことではないだろうか。

×

筆者は、原万田地域分会長。写真は、家を出る故人の柩。

学び、実践する以外に労働者階級の解放はない

四山指導部　川野房雄

三川鉱大爆発とその後の絶えることのない死亡、重大災害、そのためにつくり出されてゆく遺族やCO患者に対するその後の非人間的な会社の態度は、資本にとって、人の生命よりも生産（もの）がいかに大事かということが明らかである。

いま職場では「資本主義合理化と災害」「これとの闘い」の基本について導習している。

いま自分なりに闘いをふり返りつつ、資料を調べてゆくなかで、昭和四十二年二月一日発行の、機関紙〝みいけ〟（三池労組結成二〇周年記念）の一文が目についた。

宮浦指導部の朽網勝喜さん（私と同年である）が〝私の書棚〟という欄に、マルクス・エンゲルスという偉大な先覚者の伝記は「労働者の心に指針と闘志を与える」と次のような主張をされていたことがある。

「資本のあくなき搾取は生きる権利を奪い、家族の前途を真っ暗闇にさせたのは、それは現代社会のしくみに矛盾があるからだ」

それは、その年の一月二十一日宮浦支部紅葉ケ丘の畑中さんの落盤による死亡災害時だったが、この本の方は約百五十年ほど前に生まれたドイツのカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの、その貧乏と迫害と苦難の生涯をのりこえ、無二の親友として助け合いながら、資本主義の矛盾を科学的に明らかにしたことを証明した。

それは、搾取者の秩序が死滅することであり、不可避的に社会主義の社会秩序に転化せねばならないこと、プロレタリアートの階級闘争がこの変化を引きおこすことである。そのため組織的な力だけが社会情勢を変革しうること、そして厳密に科学的な態度と歴史的な教えに従うことの必要なことを確信させた。そうしなければ、労働者階級による政治権力の奪取は保証されないだろう、と言明した。

彼らは仕事を愛し、生活を愛し、人間を愛した。マルクスは、「何を幸福かと見なすか」、とのの問いに、「闘うこと」と答えた。そして後継者や弟子たちに、学べ！学べ！、と呼びかけた。

以上、マルクス・エンゲルス小伝の学習の意義を朽網さんが述べられているのは十年も前であり、労働災害は資本主義の搾取―合理化のせいであり、資本主義の仕組みを変えるための職場闘争―階級闘争を強めなければ、労働災害を無くすことはできない、と正しく主張されている。

朽網さんのような正しい理論と実践におくれることなく一歩一歩学習を重ね、思想性を高め、実践したいと思う。

白ろう病で告発

陥機械を導入して死者まで出した国の責任」を問うため、林野庁関係者を〝傷害罪〟で告訴、告発、注目されている。

新聞・テレビで伝えられたように、全林野労組は、このほど「欠

来春闘は5、6%に

桜田日経連会長

【連合】日経連の桜田武会長は九月十六日、「来春闘のベアは五、六%以内が適当」とする、賃金抑圧の見解を示した。

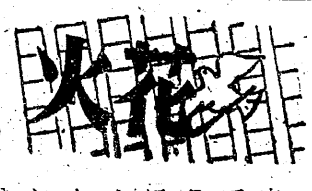
これは福島県いわき市で開かれた東北経営者大会のあと、記者会見で発言したもの。それによると、「日経連としての正式検討はこれから」としながらも、来春闘の賃上げについて「労働生産性と実質経済成長を上回るベアはインフレを招き、よくない。ガイドライン設定についてもこれからだが、五、六%以内が適当と考える」と、支払い能力による賃上げ抑制を明らかにした。

お願い

職場の皆さん、本紙でどしどし職場の許されぬ実態を告発し、会社責任を追及しましょう。

理論的にはわかっても……

福大学生　水上ほづる



私は三池に来たのは初めてで、三池闘争についてもほとんど知りませんでした。話しに聞いたとしても、それがどういうものであるかは理解できなかったと思います。

それが映像として私の目前に現われた時に、理屈ではなしに私たちに直接訴える何かを持って、すばらしいとか、すごいとかいう言葉では飾ることのできない感動として、せまってきました。

いまはただ感動としか書くことができません。その感動が何であるかはわかりませんが、しかしあの映画は十分に私の中にある何かを揺すぶりました。

はたして私は、何に感動したのだろうか。労組の人たちと直接交わりながら、何をまなんできたのだろうか。

あの時の感動が、また感動のままで終ってしまうのではないか。そんな思いが、頭の中で浮かんだり沈んだりします。

私は、「である」という立場でしか、物事を見ることができません。だから、「資本家が……」「労働者が……」といわれても、その時はなるほど、とか、ヘエそうか、とわかったような感じになっていても、実際にはその本質というのはわかり得ない。これが私の、現在の本音だと思います。

しかし三池にいったこと、そしてそこで労組の人や主婦会の人、CO患者の家族の人たちと交流がもてたことは非常によかった、と思います。

いまの私にとっての問題は、何故長期にわたって闘い続けられるのか、というところです。

最後に三池の人たちが、いまの世の中で、本当に人間味があふれていると思って帰ってきました。

学生たちの交流は真剣だった。